

☆☆星砂とサンゴ礁の海女



(沖繩サイクリング紀行)

杉浦充幸

真青な空の下、エメラルドグリーンに輝くサンゴ礁の海の上を滑り込むようにして、我々の乗った船は今、那覇港に着かんとしてい

る。目の前には陽に照らされた那覇の街々が広がっている。オキナワだ。日本と言っても本土からはるか南方の、そして数年前まではアメリカの占領下にあった島、沖縄だ。サンゴ礁の海に映える島を前にして、私はこれから走らんとする未踏の地へ思いを巡らしていった。

前々日の正午に東京晴海を出港したこのつなは丸は予定を6時間遅れて、3月20日午

後3時に那覇港へ到着した。それにしても、5人トンもある大きな船がシキ、で木の葉のごとくに揺れて気分が悪く、また船室で寝ている以外ほとんどする事がない退屈な3日間にもわたる5時間もの長い船旅がこんなにも辛いものとは思ってもよくなかった。それだけに、いかにも遠くへやってくる来たという感じがする。我々2人は重い輪行袋を担いで、やっとの事で下船すると早々と乗車を組みにかかった。今回の沖縄ツーリングは当初3人で行く予定であったが、1人が諸々の都合(大方は金銭面であろう)により行けなくなり2人で行く事になった。そこで出発前、宿泊と食事をどうしようかと迷った。でも結局、荷物が少し多くなるが安くつく点で、テントと炊事用具を持って行く事にした。しかし、テントには多少不安が残

る。と言うのは、沖縄には例の猛毒のハブが
いるのだ。しかし、そんな事は言っていない
ない。ハブが怖くてサイクリストがつかま
るか！と言う事で、テントを張る時は人家など
の人のいる場所に張ろうという事にした。

さて、乗船客や見送りの人々で混雑する中
で愛車を組み上げると、さ、そく走り出す事
にした。雑踏の中をスイスイと走り抜けたま
では良か、たけれども、おつと危い！道路の
左側を走っているではないか。——そうです。
ここは沖縄です。車は右を走らなければいけ
ないのです。自転車においてもまたしかり。
ついつい慣れで左側へ行ってしまった。沖縄
は復帰後、通貨はドルから円に変わっても、道
路は相変わらず右側通行なのであります。よ。

てしかるべく、道路の右側に誘って走り出す事に
しました。右側通行は初めての経験で、初めのう
ちは戸惑ったがやがて慣れました。でも、時々左
側通行のくせが出る事があります。当り前の話で
すが、右側通行というのは右折は案で左折は厄介
です。また、横断する時は左を見てから右を見て
渡ります。すべて逆なのです。ただ難点なのは、
自転車に乗り降りする時や押して歩く時など、車
の通る左側に体がまってしまう事です。しかし、右
側通行もオツなもんで日本本土では味わえない沖
縄ならではのものです。さて、初日はもう夕暮れも
近いので那覇市内で泊まる事にして、テントを張
る場所を捜した。その結果、奥武山公園に決定。
「奥武山」は「おうのやま」と読みます。沖縄で
は「武」は黙字で読みません。沖縄には地名と人

名に似たものが多く、また読み方も独特なので
一苦労しました。

→
A
B
明るる朝、早々と那覇を立ち南部へと向か

た。沖縄本島は左回りに一周し、その後石垣島
などの離島を走る事にコースを決めた。南部は

「沖縄戦跡園定公園」になっている。今日は戦
跡めぐりになりそうだ。那覇空港を右手に過

ぎ糸満市へと国道を突走る。暑い。さすが沖縄、
緯度が低いだけあって3月だというのに日差し

が強い。サングラスを掛ける。初夏というより
初夏だ。しかし、風は冷たくカラッとしている。

やはり時節柄、日が陰ると多少寒い。やがて右
手に海が見えて来た。綺麗だ。サバニ（クリ船）

が見える。コバルトブルーに輝く沖合の海とエ
メラルドグリーンを呈するサンゴ礁のリーフと

のコントラストが実にクリアだ。ビューティ

フル。こんな美しい沖縄の海を見ながら、やが

て我々は糸満に着いた。ここで幸地腹門中の墓

を見たのち、姫百合の塔へと向かう。途中、国

道からそれて小道をのんびりと走る。サトウキ

ビの甘い香りがあたりには漂い、南国の陽を浴び

て牛は寝そべり蝶が舞っている。実にどこかで

ある。「かめゆりの塔」——沖縄戦の犠牲とな

った特志看護婦の女生徒たちを祀っている。塔の

前に最期を遂げた大きな壕があり、無常なる香

葉や折鶴に心が痛む。ここに限らず、南部戦跡

地区には沖縄戦の慰霊碑や塔がいたる所に建

てある。摩文仁ヶ丘に行く。明るく陽光とハイ

ビスカスやデイゴの真赤な花に彩られた摩文仁
ヶ丘に立ち、澄みきった大空、紺碧の海原、そ

して静かに打ち寄せる波の音は平和で素朴な沖
縄を感じさせるが、一たび無数の弾痕や焼けた
たれか塹壕に目をやると、かつて硝煙弾雨の非
惨な戦場となつた沖縄が思い忍ばれる。そして、
これらの戦跡地が、例のごとく土産物屋の建ち
並ぶ名所として観光地化されているのには、私
自身複雑な気持ちに強いられる。

戦跡地めぐりの後は、規模では日本でも首目
だが鍾乳石の数は日本一という鍾乳洞「玉泉洞」
へと向かう。ここは全くもって観光地化され
ていて、ケイブランドという公園の中に玉泉洞
があり、入園料と入洞料と入度料金を取られた。
洞内に入ると、なるほどツララの数は驚くほど
無数にあり、結構広い。だが、一般の鍾乳洞と
比べ、非常にムンムンしている。やはり南国の

せいだろうか。洞を出ると陽がもう傾いている。
この日の晩は、少し行つた玉城村^{たまぐすく}登山という部
落で親切にも公民館を使わせてもらい、のんび
り飯を作つてそこで寝る事となつた。

翌日も素晴らしい天気である。ソテツの超えて
ある道路を軽快に飛ばす。しばらくして中城城^{なかつき}
跡に着いた。沖縄には琉球王朝時代の各残りの
城跡が色々な所にあるが、城そのものが残つて
いるのはなく、せいぜい城壁の石垣が残つてい
るくらいである。ここもそうである。沖縄の城
の石垣は日本のと多少おもむきを異にし中国風
で独得である。石垣の上に登ると、さすが城跡
だけあって高所であり眺めは抜群である。その
後、古い沖縄の家「中村家」を見て一路「コザ」
(沖縄市)へと向かう。広い道路を走り街へ入

って行くと、基地の街コザと言うだけあって横
 B-文字が多く目立つ。一瞬、アメリカの街中を走

っている錯覚に陥る。昼食に食堂へ入る。メニ

ューを見ると、「ソーキランチ」「中味」「おか

ず」「ソーキそば」……わけがわからず店

の人に聞くと、「ソーキはアバラ骨の付いたブタ

肉、中味はその名の通り中身でハラワタ、おか

ずもおかずでヤサイイタメの事をそうである。

ソバは沖縄では「沖縄そば」の事で、ラーメン

に似ているが、平べったくて腰が強い。味も変

っていて独特な味がする。また、沖縄は野菜が

豊富らしく、カツ丼などの中には色々といっぱ

い野菜が入っている。我々が一体何を食べたか

はないしよ。食後ゴサの街をぶらつくとき、日本

離れした店や外人を多く見かける。センター通

りなどは全く日本語を見かけない。いいかげん
 歩き疲れたので走り出す事にした。

ついでに、近くの平安座島まで延々37kmに

及ぶ一本の海上道路（橋ではない）がある。そ

こをちょろと走って見た後、我々はこの日の宿

泊予定地である石川市へと急いだ。途中、峠の

坂の登りで一人の外人が自転車を押して登って

いた。通りすがりに「ハロー」と声をかけると、

彼は元気よく「ハロー」と返してきた。少し行

った所で後を振り向くと、何とあの外人が頑張

って乗って追いかけて来るではないか。我々は

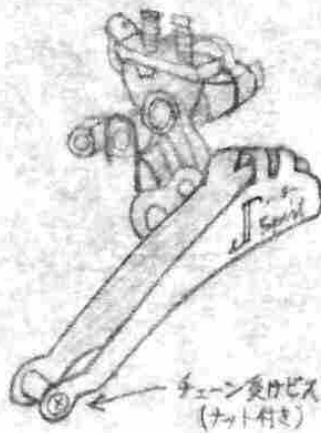
追いつかれまいとして、きつい登りをピッチを

上げてペダルを踏んだ。やがて彼は見えなくな

り、坂を登り切って下ると、そのまま石川市へ

と滑り込んだ。と、そこまでは良かったのであ

るが、急にガキ。ンという者と共にチェーンが外れてしまった。見ると、フロントディレイラーのチェーン受けビスが無くなっているではないか。あたりの地面を捜す。無い。途方に暮れていると、そこへさっきの外人が戻って来た。どうかしたのかと彼は聞く。ディレイラーが壊れたのだと答える。する



と彼は、この先にバイクショップがあると指差して、その場所を説明し出した。(この外人との会話はもちろん英語である)しかし、自転車屋へ行ってモ仕方がないので針金で留める事にした。直し終わると、もうその外人はいなかった。我々は今日の泊りを民宿に決め、宿を捜しにかかった。町の中をぶらぶら

らしていると、またさっきの外人が現われた。彼はディレイラーのチェーン受けビスを差し出した。何と、彼は自転車屋へ行ってビスを買って来てくれたのである。私はビスを受け取った。だが、ボルトとローラーだけでナットが付いていない。私の持つスパイトなのでナットが必要なのである。そこで私は彼に「Nut is not!」と、ちょっとシャレて言ってみた。彼は初めはキョトンとしていたが、意味が解かると笑い出した。そして、そのビスを買って来た自転車屋を我々に教えてくれた。我々はその外人に礼を言。て別れ、その自転車屋へ行きナットを買ってディレイラーを直したのである。親切な外人に出会った。だこの日の晩は、民宿のふとんの中でぐっすりと寝たのであった。

聖日は天気が良く存かた。朝、石川市を文
 一ち、金武鍾乳洞までは良かったが、鍾乳洞を出
 ↓発しようとしたところでパンクしてしまつた。

今回の沖縄ツーリング中において2度目のパン
 クである。前々日に1度目のパンクを起している。
 前日はデイレイラーが壊れるし、今日またパン
 クである。沖縄へ来て毎日何かしら支障を起こ
 している。明日、事故でも起こさなければよい
 が。なにと考えながらパンクを直す。相棒は先
 へ走って行ってしまつたので一人で直している
 と、そこに雨が降り出して来た。大急ぎで軒下
 へ自転車ごと大移動した。そして、そこで雨を
 しのぎながらパンクを直したのであるが、空気を
 を入れてみると、どうもおかしい。そこでもう
 一度調べ直したら、案の定もう一ヶ所別の所が

パンクしていた。やっとの事でパンクを直し終
 えて、走り出そうとした。だけど、雨はまたた
 くせん降りている。やむまで待つとうと思つたが、
 だいぶ時間が経つてしまつたので雨の中を出發
 した。相棒はどこにいるのだろうか。雨中を夢中
 で、ずぶ濡れになりながら素っ飛ばし、やっとな
 バス停で雨宿りをしている相棒を見つけた。彼
 は雨が降つて来たので雨宿りがてら私を待つて
 いたのであるが、一時間も待たされたと、ほや
 いていた。小降りになるまで、ここでもう少し
 待つ事にした。結局、この日はその後またいし
 て走る事が出来ず、夕方小さな部落に空き家を
 あつたのを幸いに、その空き家を借りて泊まる
 事にした。その晩はそこで自炊をし、沖縄の地
 酒「泡盛」でイッパイやりながら眠りに就いた。

翌朝、良い天気の中を出発した。前日の雨で予定が遅れてしまつたので急ごうとするが、道が悪くてためた。このあたりから北部山岳地域に入るの、東海岸の道は国道でありながら、地道でアツプタウンが多くて非常に走り難い。

余りにもペースが悪いので、仕方なく沖繩本島北部は東海岸から一周するのを断念し、西海岸へ出て西岸沿いを最北端「^ヘ辺土岬」まで往復するコースに予定を変更した。島を横断して西海岸の塩屋湾へ出てみると、西海岸の道は非常に良い。これなら今日中に往復できる。往復するなら荷物は不用と、近くの売店のおばさんに荷物を預かってもらい、沖繩本島最北端の辺土岬へと向かつた。辺土岬まで往復50km余りの道を軽快に飛ばす。左はサンゴ礁の海である。沖繩

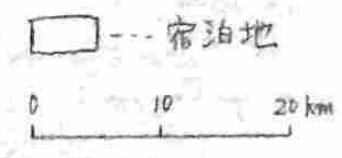
本島の中部から北部にかけての西海岸一帯は特に「沖繩海岸国立公園」に属して、一段と綺麗である。辺土岬に着き最北端の絶壁に立つと、眼前はるかには鹿見島最南のヨロン島が見える。ここからの眺めもまた感慨ひとしおである。時間がたいたので早々帰途に就いた。潮の香りの漂う中を、鮮烈なる西日を浴びて我々は壮快にペダルを踏んだ。売店に戻り荷物を受け取つて、再び装備して走り出した。日も暮れた頃、近くにヨットハーバーがあつたので、その空き地にテントを張ろうと決めた。そこで、この管理人のいる所へ行つた。すると、この管理人は親切にもここにあるキャンピングカーに泊まるように勧めた。結局、我々はその晩のキャンピングカーの中に寝かせてもらう事になった。

J B-5

OKINAWA



同行者 武石哲
 期日
 昭50年3月20日~26日
 沖繩本島
 3月27日~28日
 竹富島
 3月28日~30日
 石垣島
 3月31日~4月1日
 那覇



明るく日は本部半島をぐる。と回り、緑に埋
った長い石の堡塁のある今帰仁城跡へ行き、沖
縄海洋博会場工事現場のそばを通り、名護市
へ出て、それからブナセ岬の沖縄海中公園の中
におる海中展望塔に行き、次は万座毛へと走っ
た。走っているとき、〇〇ビーチと称する海水浴
場がたぐさ人目につく。特に西海岸は大きなビ
ーチが色々あり、中にはインブビーチという変
な名前がある。たりする。この日は真栄田岬エ
ースホテルに泊まった。

次の沖縄本島一周最終日は、嘉手納基地など
の米軍基地のそばを通って首里へ行き、守礼の
門などの史跡をぶらぶら巡り、夕方那覇港に
着いた。そして、再び愛車をバラし石垣島行の
船に乗り込んだのである。

翌朝石垣島に着くと、輪行袋のまま自転車を
預け、ホーバークラフトに乗って「竹富島」へ
渡った。竹富島は沖縄で最も美しい島と言われ
ている。周囲たった9kmの小さな島で、サンゴ
礁が隆起して出来た島である。サンゴ礁の上を
シブキを上げてホーバークラフトは5分で島に
着いてしまった。白砂の一本道を島の中央へ歩
く。部落は島の中央にあるのだ。この島の道は
すべて部落を中心に四方へ延びている。まず、
この竹富島だけにしかない「星砂」の浜へ行く。
星の形をした砂（正確には有孔虫の化石である
が）のある浜である。真白い砂を掌にすくう
と、なるほど普通の砂に混じって星形の砂が二
つ三つある。以前はほとんど星砂だったのだが、
皆が取って行ってしまい、今では非常に少なく

6 ち、てしま、たのだそうである。星砂の採取は
 一禁止らしいが幾つか持、て帰る。部落に戻り付
 近をぶらついた。道の両側には石を積んだ石垣
 のへいが並んでいる。石垣越しにつやのある葉
 を持つ福木がそびえ、あるいはたわわな房を持
 つバナナ、奇怪な気根を空中に垂らすガジュマ
 ル、真赤な花を一年中咲かせているハイビスカ
 スが石垣越しに顔を見せ、その背後に沖縄独特
 の白い漆喰でつなぎ止められた赤瓦の屋根が見
 え、その屋根の上には例の魔除けの獅子（シー
 サー）が厳然と控えている。天には透き通るよ
 うな紺青の空があり、真赤に燃えた太陽に白砂
 の道や庭がまぶしい。時に、竹富島特産のミン
 サーを織る単調な響きが聞こえてくる。実に素
 朴でのかな美しい南国の小島である。

今度は西海岸へ出てみた。正面に、島のほと
 んどがジャングルだという西表島（西表島）が見える。そ
 の左に面白い島を見つけた。立、て見ると見え
 るのだが、すわると水平線に隠れてしま、て見
 えなくな、てしま、う。非常に薄、ぺらな島だ。
 聞くところによると、その島は「黒島」といい、
 そこモサング礁が隆起して出来た島で、この竹
 富島より広いのだが最も高い所で海拔数mしか
 なく、井戸を掘、ても海水が出るので近くの島
 から水を引いているという。海がプールのよう
 に透き通、っている。熱帯魚が泳いでいる。この
 あたりの八重山群島一帯の海はサング礁だらけ
 で沖縄本島より更にすごい。海は青いものだと
 いう固定観念が一ぺんに吹、飛んでしま、う。こ
 の海は青くないのである。エメラルドグリーン

ンをはじめ、その交幻きわまりない色彩の豊かさ
は言葉には尽くせない。その夜はこの島の民
宿に泊まった。夕食に「泡盛」が出てオン・サ
・ロックで乾杯し、豊富な海の幸に舌づつみを
打った。食後には、ここの民宿のおやじせんが
蛇皮線（琉球三味線）を弾きながら自慢のノド
を聞かせてくれた。「安里屋ユンター」というこ
の竹富島の民謡を方言で、真、黒に日焼けした
顔をシワ寄せながら一所懸命歌う姿に、我々は
聞きほれた。

明くる日石垣島へ戻り、愛車を組み、石垣島
一周へと走り出した。暑い。海が綺麗だ。こう
も沖縄へ来て綺麗な海を見せつけられては、泳
がずして帰るのはもったいない。そこで、川平
という所でヤシの生い茂る浜にキャンプを張り、

翌日まる一日のんびりと泳ぐ事にした。時また
3月である。

一日のんびり過ごしたその次の日は、巨大な
ガジュマル、緑したたる福木、天にそそり立つ
野ヤシ、そしてヒルギ群落、マングローブの密
林など、熱帯原生林やサンゴ礁の海を見ながら
島を一周し、石垣港へ戻った。夕方船に乗って、
聖朝野島に戻り、沖縄の旅も終わりとなる。

思えば、沖縄の人達は多少言葉が荒。ぼくは
ぎこちなく感じられるが、話しているうちに皆
非常に親切で人情のある人達であるのがわかる。
また、女の口は南沙織のように、髪が長く、小
麦色に焼け、小さくて可愛いコが多い。そして、
沖縄はやはり日本であった。行けたらまた行き
たいと思う。星砂とサンゴ礁の海を求めて……。